

金沢大学における新型インフルエンザの流行と対策

亀田 真紀

2009年春に始まった新型インフルエンザの流行も2010年になり治まり、3月31日には厚生労働大臣より事実上の終息宣言が、8月10日にはWHOよりpost-pandemic periodに入ったとの宣言がなされた。しかし、世界的には18,449名の死亡が報告され、我が国でも死者は200人に達した。

金沢大学でも同年7月から流行が始まり、学生を中心に発症者報告総数は1,595名に及んだ。全学的に発症者の報告、手洗い・マスク着装・咳エチケット等の注意喚起、受診及び登学自粛、対策マニュアル作成等、全学的対策を講じた。発症者の報告書の集計の結果から、学部学生の発症については、サークル活動を中心として、各種イベント、クラス内での接触、さらに寮での接触が感染の機会となったと思われる。またアルバイトをしている学生も多く、学部学生への感染症対策は、地域での感染予防・拡大防止の観点からも、啓発教育・発症時の対応、咳エチケット、手洗いの励行、発症疑い者のマスクの着用等の予防対策を講

じることが大切と思われた。(図1：新型インフルエンザに関する対応 参照) 感染拡大に伴い、それまで順調に動いていた大学機能に少なからず影響が出て、学生の授業の継続や実習、さらには試験や単位認定など、多岐にわたる対応が必要とされた。一般入学試験で追試が行われたことは当初予測されなかったことである。本大学においてもこれまで経験しなかった健康危機であった。幸いにして重篤な症状になった学生、教職員は報告されていないが、今後どのような感染の流行があるかもしれず、今後も今回の経験を教訓として予防と対策を考えていく必要がある。改めて感染症対策の重要性が認識されたと思われる。

今回の感染を経験し、大学では危機管理担当理事を中心にした速やかな危機管理体制の構築と、地域の行政・保健所等との速やかな連携による、運用が望まれる。

(「金沢大学安全衛生活動報告書(2009年度)」より許可を得て、転載)

